

口頭発表

小学校の授業に馬を導入することに関する教師の意識調査および事前ワークショップの必要性について

中川美和子*

NPO ヨナグニウマふれあい広場

Survey on teachers' attitude towards introducing ponies to classes; the effectiveness of pre-class Animal Assisted Education workshops for teachers

NAKAGAWA Miwako*

緒言

NPO ヨナグニウマふれあい広場ではこれまで、与那国島と沖縄本島のいくつかの小学校で、授業への馬の導入を試みてきた。それらはほぼすべてのケースで、熱心な教員や保護者からの働きかけで導入が成功している。

授業を実施する中で私たちが常に感じるのは、導入のきっかけとなった人物と、現場の他の教員との、動物を使った授業に対する理解・態度の大きな温度差である。また、導入者が転勤などでいなくなると継続が困難になるというパターンがほとんどであるのも悩ましい。

動物を使った質の高い授業の普及・継続には、まずは教員にこうした授業の目的や効果を理解してもらうことが先決であると考え。そこで、那覇市の小学校の特別活動(クラブ活動)としての「乗馬クラブ」の指導が2年目を迎えるにあたり、全教員を対象とした動物介在教育ワークショップを開催し、その後、参加者の意識がどう変化したのかを知るためにアンケート調査を実施した。

方法

第1回目の乗馬クラブの後に、ワークショップの流れと、AAEに関する簡単な資料を全教員に配布し、目を通しておくよう依頼した。これは、ワークショップ参加者の大半が乗馬クラブを直接担当する教員ではないため、日常の学校生活のなかで、乗馬クラブ参加児童を少しでも意識しておいてもらうためである。その後、第3回目のクラブ終了後に、実際のワークショップ(馬とのふれあい、体験乗馬やふれあいなど

の実体験、馬を使った動物介在教育の可能性についての説明)を行い、その後アンケートを配布。アンケートはワークショップ実施3週間後に回収した。

アンケートの目的は2つ。1つは教員自身のこれまでの動物体験やAAEに関する知識の有無、動物に対する意識、動物を学校に入れることに対する感じ方などの現状把握。もう1つは、ワークショップ後のAAEに対する意識の変化(クラブ参加児童の変化を意識したか、クラブの継続を望むか、AAEを授業に導入してみたいか等)の把握である。アンケートは25名から回収できた。

結果

回答者の88%が何らかの動物を飼育した経験を持ち、68%が動物を「好き」と回答。しかしワークショップ以前にAAEを「知っていた」教員は24%に留まった。「乗馬クラブ」創設の話は初めて聞いた時の第一印象(ワークショップ前)については、「他の学校にはない」「なかなかできないことが経験できる」「子供が喜ぶ」「自分も馬に乗りたい」など肯定的な回答が56%、「安全・衛生面の不安」「今後継続できるのか」など何らかの不安を表明する回答が24%だった。

ワークショップ実施後の教員自身の変化に関しては「楽しかった」「ストレス・疲れがとれた」「無邪気な子供に戻れた」など肯定的な回答が64%、「動物は苦手なので怖かった」という否定的な回答が4%だった。乗馬クラブの継続を「望む」は76%、「望まない」は0。「馬を授業に使ってみたい」教員は44%に上り、「使いたくない」は0、「わからない・無回答」が56%

*連絡先: umikazehf@yahoo.co.jp

だった。

乗馬クラブ参加児童の変化の有無については、「あった」が12% (3名)、「なかった」が4%、「わからない・無回答」が84%であった。変化の内容については、「優しい言葉を使うようになった」「(クラブ直後は)精神が安定している」「自発語が出るようになった」といった望ましい変化のみで、マイナス変化についての回答はなかった。

考 察

アンケート結果からは、動物飼育の経験はあってもAAEにはなじみがなく、衛生・安全面など何らかの

不安を持っている、という教員像が見えてきた。しかしワークショップ後は、「馬を授業に使ってみたい」という回答が44%あり、どの科目に、どのように使ってみたい、という具体例を挙げる回答も40%あったことから、教師自身にAAEを体験してもらう機会を設ければ、AAEを導入する教員が増える可能性があることがわかった。こうしたワークショップを今後も実施していきたい。

謝 辞

今回の調査では、那覇市立銘苅小学校の皆様にご協力いただきました。感謝申し上げます。